

# 特養でほろ酔い笑顔

## 広まる「居酒屋」の日

高齢者が介護を受けながら生活する特別養護老人ホーム(特養)で、定期的に開く「居酒屋」が人気を集めている。自宅にいたころの晩酌が楽しみだった人にとって、入居前の日常を一時的に取り戻せる場だ。笑顔が増え、機能の回復にもつながっている。

午後6時40分、神奈川県横須賀市の特養「太陽の家二番館」の交流スペースにお年寄りが車いすで集まってきた。「居酒屋」の開店時間の午後7時まで待ちきれない様子。泡立つビールを片手に、下里喜一さん(81)は「かんぱい」と周囲とグラスを合わせ、のどを潤したのみ込み機能が弱っており、むせてしまうことがあるため、ビールにはとろみをつけてある。下里さんは「この日が来るのを毎日楽しみにしている」と話す。

居酒屋には9人が集まった。最高齢は96歳。認知症の人も多い。ビールや焼酎といった飲み物に加え、冷やっこ、カツオのたたき、枝豆も用意されていた。カツオは、

横濱市保土ヶ谷区の「レシデンシャル常盤台」も月2回の居酒屋を開催。ここでは入居者がつまみの用意を手伝っている。

## 機能回復に期待も

あるという。家族も参加できる。席の一角では、カラオケに耳を傾ける入居者の向山一さん(74)に寄り添うように妻の章子さん(70)が座っていた。一さんは「口から食べられないため、胃へのチューブで栄養をとって、章子さんは「昔カラオケによく一緒に行っていた。大勢の人がいる場にいるのが刺激になっているようで、他の人の歌をニコニコしながら聞いていた。いつかまた歌ってくれたら」と話す。

「特養居酒屋」は「明石二見特別養護老人ホームラガール」(兵庫県明石市)や「高齢者総合福祉施設清風荘」(青森県平内町)など全国で行われている。他の入居者や職員とコミュニケーションを取る場になり、笑顔が増える高齢者も多いという。昔の習慣や記憶を自然と思い出すことで意欲が湧いたり、機能回復できたという期待もある。

生活とリハビリ研究所の三好春樹代表(64)は「施設内の居酒屋は広まっている。高齢者がケアが、医療から生活へと背景にあるのだから」と分析する。(及川綾子)



「かんぱい」。好きなお酒を飲みながら、談笑する入居者。横濱市保土ヶ谷区



カラオケで歌う下里さん(左)。隣で職員がビールにとろみをつけている。横須賀市

## 患者を生きたる

2632 働く

## 死を覚悟した医師③

書き送れば、

東京の奥沢病院の院長だった松村光芳さんは2012年4月、脳腫瘍の手術を受けた。昔からの友人でコミュニケーション・ディレクターの佐藤尚之さん(68)にこんな思いを相談した。

「病気になるって初めてわかったことがある。それを友人、知人、若い人に伝えたい。残したい」  
当時55歳。その思いは佐藤さんらの尽力で、9月21日、東京・目黒での講演会となって実現した。

「僕は 確かに あなたとここにいた」と題された講演会に

## 若い人へのメッセージ

「自分にとって幸せなのは普通の生活。朝起きてご飯を食べたらおいしい、といった普通のこと」  
〈人生は泡盛。最後は消えてなくなる。だから「虚しい」のではなく、全て「緑」の中で生きていくことに感謝する〉  
最後に、次世代を担う若者たちへ伝えたいことを四つあげた。①未来を信じて労を厭わない②迷ったらチャレンジすべき③ほとんどのことは何とかなる④善の力を信じてまっすぐなものを見よう――

2012年11月23日 松村尚之